

▶ スタッフのイントラレーシック体験談 2

私が小学生の頃、任天堂からファミリーコンピュータと呼ばれる家庭用ゲーム機が登場しました。当時、爆発的な人気を博して、ファミコンブームを巻き起こしました。私も同級生と同じように、親に執拗にねだり、どうにか買ってもらうこととなりました。そして、リビングから追い出された映りの悪いテレビに接続し、ゲームに勤しむ日々が始まることになったのです。それから時が流れ、マリオがピーチ姫を助け出し、勇者が世界を救う頃には、私の視力はすっかり低下していたのです。

そんな背景もあり、眼鏡やコンタクトは私の生活において、ベストパートナーになったわけですが、時に思いがけない事態に遭遇することもありました。例えば、旅行中に眼鏡を持参し忘れて、仕方なく長時間コンタクトを装用するはめになってしまったり、ハードコンタクトを落としては、その場に居合わせた全てのひとたちを、凍てつかせたりしたこともありました。

眼鏡やコンタクトは良好な視力を得るためには必要不可欠ではありましたが、完璧でない部分も持ち合わせていると感じます。

その点、レーシック手術は完璧に近い存在だといえるでしょう。眼鏡やコンタクトから開放し、なおかつ良好な視力を与えてくれたのですから。分厚いレンズの眼鏡のわずらわしさ、コンタクトの手持ちの在庫や紛失の心配からも解放されたことは、私にとって何事にも変えられない大きな嬉しさです。私と同じように、眼鏡やコンタクトの生活に対して、不満や不自由を感じているのであれば、レーシック手術について前向きに考えてもよいのではないのでしょうか。